熊本大学教育学部紀要
第67号, 65－73, 2018

英語の過去完了相について*

松　瀬　憲　司

On the pluperfect aspect in English

Kenji Matsuse

（Received September 28, 2018）

It is perfectly clear that the perfect aspect of verbs in English was more definitely formalized and visualized by way of grammaticalization of the lexical verb *have* meaning ‘possess.’ And not only the corruption of the morphological concord between nouns and past-participial adjectives, but also word order of subordinate clauses, which was V-final in Old English, and the subsequent rigid fixation of the SVO word order even in subordinate clauses during the Middle English period seem to have contributed to the establishment of the convergence of verbal elements that the construction using *have* originally had.

Concerning Chaucer’s use of the pluperfect forms in his *General Prologue* and *The Tale of Melibee* of *The Canterbury Tales*, the situation was very similar to that found in Early Modern English. That is, the system of the perfect had not neatly been systematized like Present-day Standard English yet, although even now the demarcation between the perfect and the simple past cannot so clearly be drawn occasionally. Therefore, vacillation between the two must have been inevitable from the very beginning of the perfect. And if Chaucer had known the contracted form ‘’d’ for *had*, which can reduce one or two syllables and did not exist in Middle English, he might have used more pluperfect forms in his verse works instead of using simple past forms.

Key words : aspect, grammaticalization, subordinate clauses, V-final, pluperfect, contracted form ‘’d’

1　はじめに

大槻・大槻（2007: 191）は，16・17 世紀の初期近代英語（Early Modern English: EModE）において，動詞形態の内，過去［時制］形と現在完了［相］形の使い分けが截然としていなかった事実を以下のような William Shakespeare の例で説明している（角括弧内は作品の成立年代を示す．以下の例でも同じ）．

（1） a. You **spoke** not with her since? —*King Lear*, iv.3.37 [1604-1606]
b. I **saw** not better sport these seven year’s day. —*2 Henry VI*, ii.1.2 [1590-1591]
c. When you saw his chariot but appear, / **Have** you not **made** an universal shout / That Tiber trembled ... ? —*Julius Caesar*, i.1.47-49 [1599]

期間を表す時間付加詞の存在により，現代標準英語（Present-day Standard English: PSE）であれば，*Have* you not *spoken* や I *have* not *seen* となるべき（1a, b）の例は，ブルック（1998［1976］: 178）でも同様に取り上げられている．逆に（1c）は，when 節を従えていることから PSE では，*didn’t* you *make* となるべきところだが，ここでは現在完了形が使用されている（この現象については, 後ほど4節で検討する）. そしてどうやら事情は，現在完了形のみならず，過去完了形でも同じだったようで，同じく Shakespeare から橋本（2005: 156）が次の例を指摘している．

（2） .... I did / That I **did** not this seven year before —*1 Henry IV*, ii.5.314-315 [1597]

当該箇所は PSE であれば，[that = what] I *had* not (*done*) とすべきであろう．これに関連して，ブルック（1998［1976］: 191）は，従属節内の事象が「実際には起こらなかったことを述べる」場合に過去完了形が現れる点を指摘している．[1)]

（3） a. I thought your Honour **had** already **beene** at Shrewsbury. —*1 Henry IV*, iv.2.56
b. I thought that all things **had bin** savage heere, —*As You Like It*, ii.7.107 [1599]

つまり，主節動詞 thought がその語彙的意味内容から従属 that 節の動詞に単純過去形ではなく過去完了形を要求したということになる．いずれにせよ，上記のことから動詞の完了形という形式は間違いなく EModE には既に存在していたと言っていいが，それと過去形との機能上の棲み分けは PSE とは異なっていたらしいと言わねばならない．

本稿では，英語史における動詞の完了形発達経過と，その中でも特に「過去」完了形の振る舞いに焦点を当てて議論していく．本稿の構成は次の通りである．次節で，まず英語史における完了形構文の起源を吟味した上で，Huddleston and Pullum（2005）と Swan（2016[4]）により，PSE での振る舞いを確認する．続く 3 節では，完了形に関わる，古英語（Old English: OE）・中英語（Middle English: ME）・EModE 期及びその後の状況についてそれぞれ検討し，4 節では，特に ME 後期に位置する Geoffrey Chaucer の『カンタベリ物語（*The Canterbury Tales*）』[c1375-a1400] から韻文の『総序の歌（*General Prologue*）』と散文の『メリベ物語（*The Tale of Melibee*）』を取り上げ，EModE 期以前の過去完了形の使用状況の一例を議論する．そして 5 節で全体をまとめることにする．

2 完了形の出発点と現況

英語における，動詞の完了相を明示的に表す分析的迂言形式「have + 過去分詞」が語彙動詞 have ‘possess’ の「文法化（grammaticalization）」により生じたことに疑いを差し挟む余地はない．そしてその出発点は，例えば以下の（4a）ような OE の「他動詞」have 構文であると安藤（2002: 97）は指摘する．[2] なお，これは実はゲルマン語全般に見られる現象でもあり，それに関しては，Harbert（2007: 293-294）を参照．

（4） a. Ic **hæbbe** þone fisc **gefangenne**.
b. I have the-ACC fish-ACC caught-ACC
c. I have the fish in a caught condition.
d. I **have caught** the fish.

（4b）は（4a）の形態統語構造を表し，（4c）は（4a）の意味解釈を表している．つまり，ここでは，男性単数の名詞句である þone fisc は，所有を表す他動詞 hæbbe の対格（ACC[usative]）目的語であり，その þone fisc と呼応する目的格補語として過去分詞形容詞 gefangen が後続し，その形態は，強変化の男性・単数・対格形 gefangen**ne** という形を取っているのである．Denison（1993: 340）は，そこに以下の（5a）から（5b）へのような構文構造の再分析（reanalysis）が起こり，最終的に（4d）の形式ができあがったとする．

（5） a. Ic [$_{VP}$ [$_{V}$ **hæbbe**] [[$_{NP}$ þone fisc] [$_{A}$ **gefangenne**]]].
b. Ic [$_{VP}$ [**hæbbe** [$_{V}$ **gefangen**]] [$_{NP}$ þe fisc]].

これは本来その文の中核たる主要動詞が文法化により機能的な助動詞へと降格し，その代わりに，語彙的動詞成分を充分に持つ目的格補語であった過去分詞形容詞が主要動詞へと昇格したことを物語っている．英語の発達段階において，形容詞はそれが修飾する名詞と「性・数・格を一致させなければならない」という規則が崩壊したことにより，元々動詞から作られていた形容詞である過去分詞の「動詞性」が相対的に強められた結果なのであろう．したがって再分析後も，従来の対格目的語の，動詞直後という統語位置自体に変化はなく，結果としては，全体の枠組みが SVOC から SVO へと変質しただけということになる．

翻って，PSE における（現在）完了形について，まず Huddleston and Pullum（2005: 48-51）で確認しておく．それによると，「現在との関連（current relevance）」を特徴的に示す，[3] いわゆる学校文法で言うところの「経験・完了・結果・継続」用法が指摘されており，過去形との大きな違いも，使われる「時間付加詞（time adjuncts）」の違いとして説明されているのみならず，「複合時制（compound tense）」と指摘されていることから，完了形は点的な過去形とは異なり，線的で幅のある時の表示形式であることが分かる．しかし，何よりもこの完了形の本質を的確に表していると思われるのは，そもそも「完了形は過去時制である（The perfect is a past tense...）」という指摘であろう（またそれに続く記述から，完了形は「完了過去（perfect preterite）」と呼べそうだ）．[4] 過去形が動詞自体の語形変化により過去時を表すのに対して，完了形は助動詞を用いて迂言的に過去時を表すのである．[5]

次に，過去完了形については，以下の例で説明されている（p. 50）．

（6） a. She **had** already **gone** to bed when we arrived. [past time]
b. It would have been better if she **had gone** to bed. [modal remoteness]

c. You said she **had gone** to bed. [backshift]

過去完了形は，単に現在完了形を現在時から過去時にスライドさせたものであることを示す（6a）のみならず，（6b）の仮定法（接続法）における「法的隔絶性」や（6c）の「時制の一致」によっても特徴付けられている（それぞれ if や you said という要素がその使用のトリガーとなっている）．

なお過去形と現在完了形の使い分けに関して，Swan（2016[4]: §49.11）は次のように述べている．[6]

（7） a. The difference between the present perfect and the simple past is *not always very clear-cut*. it often depends on our 'focus': are we thinking mostly about the present relevance of a past event, or about the past details? In some cases both present perfect and past are possible with little difference of meaning.

（強調は筆者）

b. **Has** Mark **phoned**?/**Did** Mark **phone**?

また，過去形と過去完了形については，特に when との共起に関して次の指摘がある．

（8） a. When I **had opened** the windows, I sat down and had a cup of coffee.

[The first action was quite separate from the second.]

b. When I **opened** the window, the cat jumped out. —Swan（2016[4]: §54.1）

[More natural than *When I **had opened** the window*, ...: one action caused the other.]

以上まとめると，英語における（特に現在）完了相の発達は，OE 期に，明らかに「現在時における」動詞相の一種から出発して，その後に起きた文法化に伴い，むしろ「過去時の拡張形」として認識されるようになったと言っていい．したがって，完了形と過去形の判別がつきにくい状況それ自体は，OE 期から今日に至るまで，新たな過去時の解釈が定着していった経緯とパラレルに存在していたと考えられる．

3 古英語・中英語・初期近代英語期・それ以降の時期での完了形発達概観

まず OE における，完了形で使用される have の助動詞としてのステータスについて，van Kemenade（1994: 128）は "perfective *have* and passive and progressive *be* were presumably auxiliaries in Old English" と述べており，Harbert（2007: 294）は "'Have' has clearly become a perfect auxiliary, ... when it starts appearing with intransitive verbs in constructions with no objects, ..." として，þet 'that' や oðþæt 'until' に導かれた従属節で使われた際の「自動詞」過去完了形の例を挙げている．なるほど後者に関しては，自動詞は目的語を必要としないわけだから，他動詞構文とは異なり，have と自動詞の過去分詞が共起した場合，構文的には完了形という解釈しかあり得ないことになる．[7] しかし，Molencki（2017: 113）は次のように述べ，OE 期にはまだ，完了形は完全には確立していなかったと考えているようだ．

（9） ..., the Old English perfect forms are not fully grammaticalized yet, which is best illustrated by Ælfric's translation of the Latin *plusquamperfectum* form *steteram* by means of *ic stod gefyn* (= 'I stood long-ago') rather than *ic hæfde* (*ge*)*standen*. The perfect aspect can also be indicated by adverbs, particles, and verbal prefixes.

ここでは，ラテン語 sto 'I stand' の「過去完了形」の例が出されているが，確かに Ælfric はこれを「had + 過去分詞」ではなく，「過去形 + 副詞」で訳出している．[8] ただ，指摘されているのが過去完了形の例なので，現に Molencki（2017: 113）自身が同箇所で "in later texts the auxiliary and the participle tend to be juxtaposed" としていることからも分かるように，完了形自体は既に動詞成分をまとめて表示するレベルまで構文確立の足場を相当固めていたが，「過去」完了形に関しては，未だ発達途上であったとも考えられる．以下に Molencki（2017: 104）が示す興味深い過去完了形の例を挙げる．

（10） a. æfter þæm þe hie þiss **gesprecen hæfdon** ... —*Orosius*, 51.29 [870-930]

[= after that they this **promised had** ...]

b. Æfter þæm þe Lacedomonie **hæfdon oferwunnen** Ahtene þa burg ... —*Orosius*, 53.20

[= after that Lacedemonians **had conquered** Athens the town ...]

どちらも，同一資料中に現れた，接続詞 æfter 'after' に導かれた従属節である．まず，過去分詞の形態についてだが，（10a）の場合，対格目的語 þiss が中性単数なので，gesprecen はデフォルトと同形のものが使用されても不思議ではないが，（10b）は，burg が女性単数にもかかわらず，oferwunnene という女性単数用活用形ではなく，デフォルト形の oferwunnen になっていることが分かる．したがって，おそらく（10a）も（10b）

同様，中性名詞用の活用形ではなく，デフォルトと捉えられていたのではないかと思われる．もう一つ，OE の従属節での語順は，一般に（10a）のような SOV（すなわち V-final）が主流と言えるが，（10b）では主節と同じ SVO となっており，動詞成分が V として一堂に会している．これは，ひとつには従属節であるが故に，本来なら，おそらく V が末尾に生起する Lacedemonians Athens *conquered had* [= SOCV] としてスタートしようとするが（そのため都合よく動詞成分が一箇所に掻き集められ），最終的に従属節でも SVO が一般化するという語順変化の潮流も相俟って，（10b）の形が実現されているのであろう．

次に，Smith（2017: 80 & 85）が分析している ME の例から，完了形を抜き出してみる．[9)]

（11）a. ah swa þurh his deboneirte luue **hefde ouercumen** him; þet he seide on ende.
[= but so through his generosity love **had overcome** him; so-that he said at last.]
—*Ancrene Wisse* [?a1200]; Tolkien（1962: 198-199）

b. Now when aman **has visetyde** yis place of saynt katerine; and he wille turne to Jerusalem
[= Now when a-man **has visited** this place of St. Katherine; and he will turn to Jerusalem]
—*Mandeville's Travels* [c1400]; Seymour（2002: 21-23）

（11b）について，Smith（2017: 87）は，過去分詞 visetyde が助動詞 has から分離して置かれていないことを，同様のことが（11a）でも見られるように既に習慣化していたとしている．このように ME 期には，動詞成分の中央集中は充分に確立していたと言っていい．それは，van Gelderen（2018: 28）が “During the Middle English period, V-final and V2 are lost in favor of a more rigid SVO order, and nouns and verbs lose endings.” と指摘しているように，節の種類を問わず，SVO 語順の「厳格化」が進行したためと考えられる．

そして，EModE 期での完了形の状況に関しては，本稿に取りかかる出発点として 1 節で議論した通りだが，Seoane（2017: 73）は，（12）のように，EModE 期での過去形と完了形間の機能未分化が解消されるのは，後期近代英語（Late Modern English: LModE）期を待たねばならないと言う（強調は筆者）．

（12）... the perfect, which originated in Old English and became part of the tense and aspect system in Middle English, competed with the preterit for the expression of past time in Early Modern English. In other words, *the clear-cut functional differentiation between the two had not yet been reached*; the PDE [Present-Day English] rules for their use became established only in the early 18th century.

なお，LModE 期以降に関しては，Fischer and van der Wurff（2006: 140-141）によると，まず同じゲルマン語系列でも，英語・スウェーデン語では，完了形は be 動詞をその助動詞として使用することが放棄され，より「動詞相標識」性を強めていったが，オランダ語やドイツ語では，be も have も完了の助動詞として維持され，より「時制（時称）」の一部として機能するようになっていった．さらに，スイスドイツ語のような地域方言では，完了形が完全に過去形に取って代わってしまっている一方，[10)] 現代英語では，特にアメリカ英語で逆に完了形が過去形に対しての足場を失いつつあるという．これに関連して，アメリカ英語と異なり，イギリス英語では，簡略性を優先する新聞においても，完了形は（より語数の少ない）過去形に対抗する位置を依然として保持していると Biber et al.（1999: 463）は指摘する．なおこの傾向は，その特殊な register に留まらず，口語でも大なり小なり見られるようで，Sakamoto（2009）の母語話者への調査によると，そこには「ポライトネスとスタイル」が関わっているという．つまり，イギリス英語話者には，両形態間の純粋に文法的な時称的差異というよりはむしろ，（現在）完了形の方が過去形よりもポライトであり，より標準的な（フォーマルな）形式であると捉えられていると Sakamoto（2009）は結論している．[11)]

4 『カンタベリ物語』の韻文と散文における過去完了形

この節では，後期 ME 東中部方言で書かれた『カンタベリ物語』[c1375-a1400] の Fragment I（Group A）に属する韻文『総序の歌』全 858 行と，Fragment VII（Group B^2）の散文『メリベ物語』全 927 行に見られる過去完了形について，Benson（2008^3［1987^3］）版の刊本とその PSE 訳（Wright（2011［1985］））との比較を中心として，もうひとつの PSE 韻文訳である Coghill（1977^4），さらに，一部創作・改変を含む PSE 散文訳である Ackroyd（2009）も参照しつつ議論する．[12)]

特に『総序の歌』は，主にその物語に登場する人物の紹介部分に当たるので，その人物の人となりを描写するために過去形や過去完了形が頻繁に用いられていることから，今回資料として選択した．この『総序の歌』について，Chaucer の ME と Wright の PSE 訳との比較の結果は，以下の（13）の通りである．[13)]

（13）a. ME・PSE ともに過去完了形が用いられている：22 例
b. ME・PSE のどちらかに過去完了形が用いられるが，もう片方は定形動詞過去形：17 例
c. ME・PSE のどちらかに過去完了形が用いられるが，もう片方は定形動詞以外：11 例

（13a）には特にコメントを要しないと思うが，（13b, c）についてはさらに，ME で過去完了形が用いられる場合と, PSE で用いられる場合とに分けられる．（13b）では, 前者が 2 例, 後者が 15 例だったのに対して, （13c）では，前者が 6 例，後者が 5 例であった．この（13b）の状況だけを見ても，PSE での過去完了形使用の整備状況が充分窺われるが，以下，具体的にいくつか見ていくことにする．

例えば，次の騎士の描写である．なお，以下，例文 a.：Chaucer, b.：Wright, c.：Coghill, d.：Ackroyd という構成で提示する．ただし, Coghill（1977[4]）と Ackroyd（2009）には『メリベ物語』は収録されていないので, 例文（17）には c. と d. はない.

（14）a. He nevere yet no vileynye ne **seyde** / In al his lyf unto no maner wight. —I, ll. 70-71
b. He**'d** never **been** foul-spoken in his life / To any kind of man; ...
c. He never yet a boorish thing **had said** / In all his life to any, come what might;
d. ... and no oath or indecency ever **passed** his lips. He **was** never insolent or condescending.

「生涯一度たりとも悪口を言ったことがなかった」という騎士の美徳は，PSE であればやはり，（14b）のようにその時までの経験を表す過去完了形で表現すべきところであろうが，Chaucer は単純過去形を使用している．ただここで注意しておきたいのだが，特に口語において，PSE にはあるが，ME にはなかったこの「'd」という had の縮約形の存在は, 特に韻文作成時には, 非常にクルーシャルであると言わねばならない（ただし Coghill は，had をしっかり使っている）．なぜなら，ME では過去完了形を使う場合，必ず 1 音節（had / hɑd/）もしくは 2 音節（hadde / hɑddə/）が必要だったところを，PSE では「ゼロ」音節で処理できるからである．したがって，もし Chaucer もこの縮約形を使えていたら，過去完了形で表現していた可能性も捨てきれないのである（同様のことは，have の縮約形「've」にも言える）.[14] 面白いことに，散文訳では，語彙を変えて，Chaucer と同じく過去形で処理しているが，経験を表す副詞が共起している点は確認できる．

次も同じく騎士についてだが，その戦歴紹介の一部である．

（15）a. At mortal batailles **hadde** he **been** fiftene, / And **foughten** for oure feith at Tramyssene / In lystes thries, and ay **slayn** his foo. —I, ll. 61-63
b. **Fought** fifteen mortal combats; thrice as champion / In tournaments, he at Tramassene / **Fought** for our faith, and each time **killed** his man.
c. In fifteen mortal battles he **had been** / And **jousted** for our faith at Tramissene / Thrice in the lists, and always **killed** his man.
d. He **had fought** fifteen battles, and **taken** part in three tournaments. These exploits **were** not for love of glory, however, but for love of Christ.

今度は（14）とは逆に，（15a）の foughten・slayn は過去形ではなく，明らかに fighten・sleen の過去分詞であることから，Chaucer は過去完了形を使い，PSE の Wright では，直前にあるのは主語 he のみなので，単純過去形が使われていることが分かる．実は，この前後の騎士の戦歴描写に関しても，Chaucer は一貫して過去完了形を使用しているのである．経歴ということで過去完了形が相応しいと感じられたのであろう．それに対して Wright は，ME 同様に過去完了形を使用する部分も随所にあるものの，この騎士の生死をかけた戦闘や馬上槍試合については，（he ではなく，he'd とすることができたにもかかわらず）単なる過去の事実として淡々と描写している．しかし，Coghill も Ackroyd も，Chaucer と同じく過去完了形を使用していることから，PSE では両者間にそれほど大きな意味的差異は感じられないということであろう．

過去完了形が定形動詞の過去形以外のものに置き換えられている例も見てみよう．

（16）a. At Lyeys **was** he and at Satalye, / Whan that they **were** wonne, and in the Grete See / At many a noble armee **hadde** he **be**. —I, ll. 58-60
b. At Ayas and Adalia he **had been** / When they **were** taken; and with the great hosts / **Freebooting** on the Mediterranean coasts;
c. In Anatolia he **had been** as well / And **fought** when Ayas and **Attaila** fell, / For all along the Mediterranean coast / He **had embarked** with many a noble host
d. He **had proved** himself in Granada and Morocco and Turkey. Where **had** he not **travelled**, and where **had**

he not **been** victorious?

前半のトルコの二都市攻略に関わる部分には，when 節と共に，Chaucer には過去形，Wright には過去完了形が使用されるといった，（13b）のパタンが見られ，後半の地中海遠征の部分では，（13c）のパタンである，Chaucer が過去完了形を使った定形節で表現しているところを，Wright では，非定形の現在分詞が使用されている．ちなみに，Coghill では，当該箇所はすべて過去完了形となっているし，簡略化され，改変されてはいるが，Ackroyd でも過去完了形のみが使用されている．

そして，散文である『メリベ物語』の冒頭部分に，以下の非常に興味深い例を我々は発見する．

（17）a. Upon a day *bifel* that he for his desport **is went** into the feeldes hym to pleye. / His wyf and eek his doghter **hath** he **left** inwith his hous, of which the dores *weren* faste yshette. / Thre of his olde foes **han** it **espied**, and *setten* laddres to the walles of his hous, and by wyndowes **been entred**, / and *betten* his wyf, and *wounded* his doghter with fyve mortal woundes in fyve sondry places— / this is to seyn, in hir feet, inhire handes, in hir erys, in hir nose, and in hire mouth—and *leften* hire for deed, and *wenten* awey. Whan Melibeus **retourned** was into his hous, and *saugh* al this meschief, he, lyk a mad man rentynge his clothes, *gan* to wepe and crie. —VII, ll. 963-968

b. One day, it *happened* that, for his pleasure, he *went* into the fields to amuse himself. / His wife and his daughter *remained* at home in his house with its doors securely shut. / Three of his old enemies *saw* this, and *placed* ladders on the walls of his house and *entered* through its windows, / and *beat* his wife and *wounded* his daughter with five mortal wounds in five different places— / that is to say, in her feet, in her hands, inher ears, in her nose, and in her mouth—and they *left* her for dead and *went* away. When Melibee *returned* to his house and *saw* all of this mischief, he *tore* his clothes like a mad man and *began* to weep and cry.

（17a）には，完了形が 5 回使用されている．その内訳は，現在完了形 4 に対して，過去完了形 1，さらに，他動詞用 have を用いた現在完了形が 2 に対して，自動詞用の be を従える現在完了形（註 7) 参照）は 3 である．そしてここでの唯一の過去完了形は，自動詞 retournen の完了形である retourned was であるが，PSE 訳では，これを過去形 returned で表しているだけでなく，全てが単純過去形で処理されている．Fischer, De Smet and van der Wurff（2017: 120）は，このような現在完了形と過去形の交替現象は PSE にも見られるとして，Engel and Ritz（2000）で議論されている現代口語オーストラリア英語の story-telling の例を取り上げ，[15] ここでの現在完了は「歴史的現在（historic present)」の機能の名残であるとする．つまり過去形が物語の場や背景を設定し，完了形がプロットを進めつつその筋での重要性を際立たせているのである．（17a）は物語の冒頭部分であることを考慮すると，まさにこの手法が取られていると言える．すなわち，Upon a day bifel から wenten awey まで過去時の枠組みを作り，そこでの特に重要な行為を現在完了形で表すことによって弥が上にも緊迫感を醸成している．おそらく，1 節で言及した Shakespeare の（1c）での現在完了形も同様に説明できると思われる．そしてその流れで，when 節中に過去完了形が生じているのは，これから惨劇を目の当たりにするメリベの帰宅を強調する狙いがあったと解釈できる．

5 まとめ

『メリベ物語』の過去完了形を見る限り，PSE での ‘when，after，if，that’ といった接続詞に導かれた従属節に生起する場合がほとんどで，主節で生起しているのは，以下の ‘had not ... mistaken, ... nor said’ に当たる 1 例のみだった（前半部分では，完了形が if 節中と［非定形だが］that 節中に見られる）．

（18）And yit if I **hadde seyd** that ye sholde **han purchased** the pees and reconsiliacioun, I ne **hadde** nat muchel **mystaken** me ne **seyd** amys. —VII, l. 1689

仮定法ではなく，事実として「自分は間違ったことは言ってなかった」とメリベの妻プルーデンスが断言するくだりである．上記（2）や（6b，c）でもそうだったが，このように，OE 期より過去完了形の主要機能領域は従属節だったと言ってよさそうである．ただ Chaucer では，（17a）のように過去完了形が when 節にかなり多く現れることと「経験」を表す際に過去完了形ではなく，過去形が使用される例が特に目を引いた．上記（14a）同様以下の（19）のように，『メリベ物語』でもやはり過去形が現れている．

（19）for he **dide** nevere synne, ne nevere **cam** ther a vileyns word out of his mouth. —VII, l. 1503

これは「副詞＋過去形」で過去完了相を表すという OE 期以来の手法（上例（9）参照）の名残であろう．LModE 期以降に，現在完了形に準じて，それを過去完了形使用の方向で整備してきたのである．

また，殊に韻文においては，純粋に文法上の制約と言うよりもむしろ，PSE 韻文訳で多用されていた，過去完了を簡略に提示することが可能なデバイス，had の縮約形「'd」の存在といった表記上のイノベーションの有無も，当時の過去完了形使用の多寡に影響したのではないかと思われる．

註

* 本稿は，2018 年 9 月 15 日に熊本大学で開催された「熊本言語学談話会（KLC）」で筆者が発表した内容を加筆修正したものである．当日，熊本県立大学名誉教授三木悦三先生と熊本大学の市川雅己先生には貴重なご助言をいただいた．この場をお借りして感謝申し上げます．

1) オリジナルの指摘は，Wilhelm Franz, *Die Sprache Shakespeares in Vers und Prosa*, 4th edition of *Shakespeare-Grammatik*, (Halle: Max Niemeyer, 1939), p. 657 である．主節動詞の語彙的意味により従属節に法的な読みが施され得るということを示している（松瀬（2018: 401）の議論も参照）．

2) 同様の例を使用した指摘が児馬（1996: 50）にもある．

この完了形の have の文法化とパラレルな現象として「have ＋ to 不定詞」がある．Fischer（2016: 252）によれば，（ib）のいわゆる have to 構文は（ia）の構文から文法化を経て確立した．

（i）a. ic **hæbbe** þone mete **to etene**. ［食べるべきその食べ物を持っている］

[= I **have** that food **to eat**.]

b. I **have to eat** that food. ［その食べ物を食べなければならない］

3) Swan（2016[4]: 47.3）の定義では，“present perfect: thinking about the past and the present *at the same time*” となる（強調は筆者）．

4) この点について，Huddleston and Pullum（2002: 140-141）ではもう少し詳しく，従属節や法助動詞と共起した場合，完了形は（8a）のような「非指示的（non-deictic）過去時制」であり，（8b）のように「複合前時間性（complex anteriority）」を持つと説明している．

（ii）a. He is believed to **have written** it last week. ［先週書いた／書き終えた］

b. He may **have been** here ever since. ［以来ずっとここにいた］

（ii）を「参照時（the time referred to: T_r）」と「志向時（the time of orientation: T_o）」との関係で見た場合，（iia）は「T_r < present T_o」であり，（iib）は「T_r before and up to T_o」であることから，彼らは（iia）は非指示的であり，（iib）は複合的に前時間性を持つことになるとしている．

5) 「時制（tense）」は，通常定形動詞の形態論的要素として捉えられ，事実過去形では動詞の過去形態素（-ed）が過去時制を表しているが，この定義では，（過去完了形は問題ないが）現在完了形においては，いわゆる現在形が過去時制を表すことになってしまう．しかしだからこそ「複合時制」という定義が必要になるのであろう．

6) ちなみに，現在形と現在完了形の使い分けに関しては，次の例が分かり易く説明している．

（iii）a. How long **are** you here for? [= until when; when are you leaving?]

b. How long **have** you **been** here for? [= since when; when did you arrive?] —Swan（2016[4]: §52.1）

7) Molencki（2017: 112-113）によれば，OE では，（iva）のように，自動詞はもともと「beon/wesan ‘to be’ ＋過去分詞」という形式で完了形を構築していたのだが，後に have 助動詞による完了形形成の一般化に伴い，（ivb）のように habban ‘to have’ と共起するようになった．

（iv）a. Swæ clæne hio **wæs oðfeallenu** on Angelcynne —*Pastoral Care*, Pref. 13 [9th c.]

[= so entirely it **was fallen** in England]

b. Þa Moyses **hæfde gefaren** ofer ða Readan Sæ ... —*Exodus*, 15.1 [10th c.]

[= When Moses **had gone** over the Red Sea ...]

8) 面白いことに，ラテン語の過去完了形は「表面上一語で」表されているが，実はその構造は「完了語幹 ＋ esse ‘to be’ の未完了過去活用形」となっており，元々分析的に作られているのである．（9）で指摘されている steteram ‘I had stood’ は，完了形 steti ‘I have stood’ の語幹 stet- と未完了過去形 eram ‘I was’ が合体してできている．つまり，英語の過去完了形が複合的に表されるのもむしろ当然と言えよう．

9) フォントがないのでセミコロンで示した記号は，実際には，セミコロンを 180 度回転させたような punctus elevatus と呼ばれる句読記号である．

また，Tolkien（1962）とは，J. R. R. Tolkien (ed.), *The English Text of the Ancrene Riwle: Ancrene Wisse*, *edited from MS*,

Early English Text Society, 249 (London: Oxford Univ. Press) であり，Seymour（2002）は，M. C. Seymour (ed.), *Mandevill's Travels: The Defective Version*, Early English Text Society, 319 (London: Oxford Univ. Press) である．

10) このことは，フランス語（これはロマンス語だが）では，同じ現在完了形としてスタートした「avoir 'to have' ＋過去分詞」という複合形式の「複合過去（le passé composé）」形が一般的に「過去」時を表し，いわゆる動詞の語形変化による「単純過去（le passé simple）」形は，むしろその用法が主として書き言葉に制限されている事実を彷彿とさせる（仏語学の市川氏の指摘による）．

11) Sakamoto（2009: 15-16）には，鍵をなくしたときに母親に対して，(A) I **lost** my key. もしくは (B) **I've lost** my key. のどちらを使うかという問いに対して，"(B) sounds more natural to me. (A) doesn't sound wrong, but it does sound like *a non-standard version* of English," "(A) is *quite informal*. I would not say it because I would not be rude to my mum" というイギリス英語母語話者被験者の反応が記載されている（強調は筆者）．また，Sakamoto（2009: 31）が引用する Drinka（2008）では，後期 ME において，母親の現在完了形の使用頻度が子供の使用頻度に影響する傾向が指摘されている．これは，Sakamoto（2009）が主張する「教育」が完了形の使用に何らかの影響を与えるという仮説を支持する一例である．なお, Drinka（2008）とは，2008 年 9 月 5 日に開催された，The University of Texas, San Antonio の Bridget Drinka 教授による熊本県立大学での講演，"The Rise of the Present Perfect in Late Middle English and Early Modern English" を指す．

12) もちろん，韻文訳は散文訳より使用する語の選択に制限がかかることは言うまでもない．

13) Wright（2011［1985］）の『メリベ物語』PSE 訳は部分訳であり，完全訳ではないので，オリジナルとの対応箇所を網羅することはできず，したがって『総序の詩』のような計量的数値は得られなかったが，本編では，対応箇所を抽出し，議論している．

14) ただ，the の縮約形「th'」は，th'encrees 'the increase' (I, l. 275) など散見される．ME はフランス語の影響を大きく受けているので，「母音衝突（hiatus）」を嫌うフランス語では，定冠詞 le/la が母音で始まる単語の前では「l'」となることと関係しているのであろう．

また PSE 縮約形「've」に関して，完了形 I've got は，普通に現在形の I have の意で用いられるし，より口語的な（アメリカ英語では, 過去分詞が gotten であることから表面上「過去形」に見える）I got も同様に現在形として用いられている（三木氏の指摘による）．

15) D. M. Engel and M.-E. Ritz, "The use of the present perfect in Australian English," *Australian Journal of Linguistics*, 20, pp. 119-140.

また，Benson（2008[3]［1987[3]］: xxxvii）でも，Norman Davis による Chaucer の言語の解説として以下の記述がある．

（v）A characterristicfeature of Chaucer's narrative style is the use of present forms to refer to past time, often parallel past forms closely following: *She walketh up and doun ... And as an aungel hevenysshly she soong* (I. 1052-55), ...

現在形の walketh が，過去形の soong とともに walked の意味で使用されているのである．

参考文献

Ackroyd, P. 2009. *The Canterbury Tales: A Retelling by Peter Ackroyd*. London: Penguin Books.

安藤貞雄. 2002.『英語史入門』東京：開拓社.

Benson, L. D. (ed.) With a new forward by C. Cannon. 2008 [1987]. *The Riverside Chaucer*. 3rd edition. Oxfiord: Oxford Univ. Press.

Biber, D. et al. (eds.) 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson.

ブルック，G. L. 三輪伸春・佐藤哲二・濱崎孔一廊他訳. 1998.『シェイクスピアの英語』東京：松柏社. [= G. L. Brook, *The Language of Shakespeare*, (London: Andre Deutch, 1976).]

Coghill, N. (trans.) 1977. *The Canterbury Tales*. 4th edition. London: Penguin Books.

Denison, D. 1993. *English Historical Syntax*. London: Longman.

Fischer, O. 2016. Morphosyntactic change. In M. Kytö and P. Pahta (eds.), *The Cambridge Handbook of English Historical Syntax*, 237-255. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Fischer, O., De Smet, H. and van der Wurff, W. 2017. *A Brief History of English Syntax*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Fischer, O. and van der Wurff, W. 2006. Syntax. In R. Hogg and D. Denison (eds.), *A History of the English Language*, 109-198. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Harbert, W. 2007. *The Germanic Languages*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

橋本功. 2005.『英語史入門』東京：慶應義塾大学出版会.

Huddleston, R. and Pullum, G. K. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Huddleston, R. and Pullum, G. K. 2005. *A Student's Introduction to English Grammar*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

児馬修. 1996.『ファンダメンタル英語史』東京：ひつじ書房.

松瀬憲司．2018．学校英文法における「法」について―英語史的観点から―．西岡宣明・福田稔他（編）『ことばを編む』, 399-409．東京：開拓社.

Molencki, R. 2017. (Old English) Syntax. In L. J. Brinton and A. Berg (eds.), *The History of English*, Vol. 2, *Old English*, 100-124. Berlin: Mouton de Gruyter.

大槻博・大槻きょう子．2007．『英語史概説』大阪：燃焼社.

Sakamoto, A. 2009. *A Study of Present Perfect in British English*. Unpublished BEd thesis. Kumamoto University.

Seoane, E. 2017. (Early Modern English) Syntax. In L. J. Brinton and A. Berg (eds.), *The History of English*, Vol. 4, *Early Modern English*, 68-88. Berlin: Mouton de Gruyter.

Smith, J. J. 2017. (Middle English) Syntax. In L. J. Brinton and A. Berg (eds.), *The History of English*, Vol. 3, *Middle English*, 78-95. Berlin: Mouton de Gruyter.

Swan, M. 2016. *Practical English Usage*. 4th edition. Oxford: Oxford Univ. Press.

van Gelderen, E. 2018. *Analyzing Syntax through Texts: Old, Middle, and Early Modern English*. Edinburgh: Edinburgh Univ. Press.

van Kemenade, A. 1994. Old and Middle English. In E. König and J. van der Auwera (eds.), *The Germanic Languages*, 110-141. London: Routledge.

Wright, D. (trans.) With an introduction and notes by C. Cannon. 2011 [1985]. *The Canterbury Tales*. Oxford: Oxford Univ. Press.